
甘えても…良いですか?

ベガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘えても…良いですか？

【Nコード】

N4267V

【作者名】

ベガ

【あらすじ】

ある日、ポストに入ってたのは名前も知らない学校からの案内書と、名前も知らない父親からだった…。

愛されたいけど愛されなかった…。

愛される事を知らない少女が出会ったのは、不思議な人達…。
少女の心の傷を癒してくれるのは誰か…。

逆ハー状態です。

とりあえず主人公総受け。

エロは多分ありません。

（キスとかならあるかも…。）

シリアス風味なコメディです（笑）

シリアスなんかコメディなんかはつきりしません！！！！

適当に見て下さい☆

※

しばらく一次創作の方に専念しようかと思えます。
向こうがある程度進んだらまた再開します。

…削除はしませんよ！！！！（↑必死ww）

☆主人公☆(改) (前書き)

ちよつと、性格に付け足しを…。
多分、今後も主人公のキャラ変わりそうです。

☆主人公☆(改)

桂木 美優

カツラギ ミユ

15歳

- ・ 幼い頃から母親から虐待を受け育った。
- ・ 愛される事を知らない。
- ・ 父親は知らない。
- ・ 体の至るところに痣がある。
- ・ 肩に蝶のタトゥー。
- ・ (母親の恋人にイタズラで…)
- ・ 少し情緒不安定。
- ・ (お決まりの) 絶世の美少女。
- ・ とりあえず、男子は全員一目惚れ。
- ・ 女子にもモテる。
- ・ 栗色のセミロング。
- ・ 毛先はくるってなってる。
- ・ なんか甘い香りがする。
- ・ 頭は良い。
- ・ 中3の時学校に通ってなかった。
- ・ 人に弱味を見せたくない。
- ・ 作り笑いが得意。
- ・ 結構大食い。
- ・ 太らない体質。
- ・ 性格はマイペース&mp, おおらか。
- ・ 何事も動じない。
- ・ なんか鈍感。
- ・ 警戒心はほとんどない↑

☆学園☆（前書き）

W学園の細かい設定ですな（'A'）

☆学園☆

世界W学園

・太平洋のど真ん中に位置する。 ・シールドが張っており、周囲から感知されないようになってる。 ・シールド内は一つの島になっている。

・形はお城。

・敷地面積…東京ドーム百個分。

・内装は中世のお城のデザイン。（要はホグワーツみたいな。）

・女子寮は『白花寮』。男子は『青空寮』と『星空寮』。

（枢軸↓星空。連合↓青空。）

（女子は人数が少ないため一つ。） ・トイレ、シャワー付きの個室。

・各寮は搭になってる。

6

・各々携帯とパソコンが支給。

・また、月一回のお小遣いやテストによるボーナスが支給。

・授業は主に国・数・理・家・英と政治・国際・福祉・マナーの計九教科。

・講師は全てその道のプロ。

・また、週一回の世界会議。

・元々、世界の発展と平和への足掛かりの為に創られた。

・制服は日本がデザイン。

・基準服と各国の好みによるトッピングがある。

（美優はスカート以外基準服。）

・女子は、ブラウスが五種・リボンが十種・靴が四種・靴下が三種。
・男子は、ワイシャツが五種・ネクタイが五種・ベストが六種・靴
が四種。

・なお、リボンやネクタイは取り外し自由。
・また、パーカーなど着用可。

☆学園☆(後書き)

次回から本編スタート☆

絶望の夜と新しい朝

いつからだろうか…

生きるのに執着し始めたのは…。

夕方。

午後5時。

出勤時間だ。

頭痛薬で無理やり二日酔いを抑え、自転車に乗る。
懐かしい通学路を避け…向かうは駅裏のキャバクラ。此処で私は
歳を誤魔化し働いている。

別に、自分からこの店に働いてる訳じゃない。

本当は学校に行きたい…。

友達が欲しい…。

こんなはずじゃなかった。

私の人生こんな惨めなものじゃなかった…。

全てはあの女のせいだ…。

私は父親を知らない。別に、知りたいとも思わない。
というより、問題はそこじゃない。

幼い頃から、私は母親から虐待を受け育った。その証拠に私の右肩には蝶のタトゥーが刻まれてる。昔、母親の恋人にイタズラでいれられた。

永遠に消えない私の傷。

どうしても私はあの女が憎かった。

でもどうやっても殺せなかった。だから私は決めた。

『私は死なない』

あの女に思い知らせる為に…。

この店に来たのは2ヶ月ぐらい前。学校帰りに強面の人にからまわれたところからだ。

その人の話によれば、母は八百万の借金を残し逃亡。借金の肩代わりが私だと言う事だ。

勿論、私は拒んだ。

第一、私は中学生でしかも未成年だ。法律が許してくれない。

でもそんな常識は通用しなかった。

それからは：酒とタバコに囲まれる生活だ：。慣れない酒のおかげで身心共に崩壊寸前。

ここまで保ってるのが奇跡だ。

お金はその日の売上やチップも全て、店の外で見張ってるあいつらに巻き上げられる。

少なかったりしたら殴られる。

もう…こんな生活は嫌だ。

普通の人生を送りたいよ…。

「ユミさーん！ご指名入りました！」

「はい。」

うだうだしても仕方ないから仕事は一応しとく。

テーブルには中年ぐらいの紳士っぽい人がいた。何気にドンペリを飲んでる。

（この不景気に羽振りがいいな…）

「ご指名ありがとうございます。ユミって言います^^」

特技の作り笑いで好感度を上げて…ん？？

その紳士はジーっと私の瞳を見た。私もその瞳につい目を奪われた。

（何故だろう…私…この人知ってるかも…。）

「Σあっ、失礼。」

「いいえ…。」

（なんだったんだろ…今の間…。）

それから紳士は一時間ほど店を後にした…。
私の方はその後、いつも通り酒を飲みすぎた…。

店が閉店し、出るといつもの強面の人達。
無言で売り上げを渡すと、ウチの一人が中を数えた。

「おい！ たったこれだけかよ！！」

「今日は二日酔いが酷かったから…仕方ないんです。」

「たつく…かわいいからイイ気になってんじゃねえよ！！！！」

ドスッ

背の高い人が腹を殴った。

「っ…。」

「明日もこうじゃただじゃおかねえからな！！！！」

あいつらが去った後も…私はその場でうずくまっていた。

午前3時。

フラフラになりながらも、自転車に乗ってやっと帰宅。

ポストには郵便物がたまっていた。

もうろうとする意識の中、入ったのは案内書と白い封筒。案内書の方は、名前も知らない学校のパンフレット。

（そういや…中2の時頼んだっけ…。）

なんて事を訳わかんない事を考えながら中身を開いた。

そこには、なんの変鉄のない普通のパンフレット。制服がかわいい学校だった。裏面にはある文字が目に入ってた。

『明日朝。お迎えに行きます。』

（冗談でしょ…。）

その文にはあえて疑問を持たない事にした。

そのまま一気に眠気が襲い…死んだように眠った…。

パンフレットにあった学校は…

『世界W学園』

玄関で死んだように眠ると…

ガチャッ

「おはようございまーす。美優ちゃん、お迎えに来たって…ええええええ！？」

「うるせえぞお…。スペイン。」

「ああ：ロマ：どないしょ…。美優ちゃんが：死んどる。」

「落ち着け、スペイン。：よく見ろ。寝てるだけだ。」

「ほんまか！？よかったあ。」

「とりあえず、ここじゃ風邪引くからベッドに運ぶぞ。」

そう言って、誰かが私を拾い上げた。

脳は起きてるけど、体は全く動かず、まぶたさえ持ち上げられなかった。

そのまま私は、また深い眠りに落ちていった…。

絶望の夜と新しい朝（後書き）

お迎えコンビは独伊と西ロマで迷った挙げ句…西ロマにしました☆

右肩の蝶は鏡音リン・レンの「右肩の蝶」のオマーージュですけ

ど…気づきました？ ^^

ちなみに個人的にはリン派です（・ω・）キリッ

太陽な二人

（ロマーノ side）

ベッドに横たわる少女は、思っていた以上に可愛かった。起きていたら間違いなく美少女だろう。

「なあ、ロマ。この子…めっちゃ軽かったで…。」

少女を持ち上げたスペインは、そう感想を漏らした。

本当は俺がやりたかったのに。

「なんや…何にも食べてないような感じやったわ…。」

スペインの言葉を聞き、俺は部屋を見回した。

畳の部屋で2LDK。たいして小さくもない部屋。…だが、どことなく空気が重い。

そして何より気になったのは、服の趣味だ。

少女が着てる服はもちろん、今日に入るだけでも、明らかに少女の容姿には合わない。

少なくとも、露出の激しい服は似合わない。

（この服は誰の物だろう…。）

「なあ、ロマ。親分、美優ちゃんの朝ごはんつくるさかい、代わりに見とってな♪」

「え…ああ。分かった。」

そう言うのと、スペインは台所に行った。

改めて、少女の寝顔を見た。

本当にかわいい寝顔だ。天使みたいだ…。

（この寝顔をいつまでも、守っていたい…。）

そう、心の底から思える寝顔だった。

ふと少女の右肩に気がついた。首筋から何か見える。

（ここは見るべきか…いやまて。仮にこれが見られたくないものだったら…。）

スペインは台所。
当の本人は爆睡。

どうする！
俺！！

究極の選択を迫られた俺だった…。

＼スペインside＼

ロマーノを残し、一人台所に立ってさっき少女を持ち上げた時の感覚を思い出した。

その肩幅は小さく小柄。

でも違和感もあった。あまりにも軽すぎる事。

よう見たら、贅肉がほとんどついてない。かといって、筋肉質かといえはそうでもない。分かりやすいえば、『痩せこけてる』といえはええやろう。

どっちにしろ、腹が減っては戦はできぬ。

何か食べて元気になってもらわんと☆

俺は冷蔵庫の中をあさりながらそう考えた。

（なんや…何も入ってないやん…。しゃーないな。ちょっと買い出しに行ってくるか。）

「ロマーノ、親分買い出しに行くからなー！」

「おう。」

アパートを出て、携帯で近所にスーパーがあるか検索していると…あることに気がついた。

（そーいや、さっき持ち上げた時右肩になんかあったなあ…。なんやっただけえ…。…あかん。思いだせへん。…年かなあ。…）

とりあえず、今は携帯で検索した店に向かった。

太陽な二人（後書き）

今回は若干少ないです。

まあ、主人公じゃないもんね（笑）

あとラブフラグが若干立ってますねえ。ローマノは垂直に立ってるけど。

多分これからこんな風にみんなと関わりますよ☆

つか、今回主人公ずっと寝てますねえ（´ω、´）

予期せぬ朝

目が覚めると隣に誰か居た。アホ毛が特徴的な人だ。

「えっと…あなたは？」

「俺はイタリア人。ロマーノ。ロマーノって呼べ。」

（何故に国名？）

「はあ…私は「知ってる。」えっ?？」

「桂木 美優…だろ。スペインから聞いた。」

そう言っつて、ロマーノさんは私のおでこに手を当てた。

（ひゃっ！／＼／＼）

「熱はないみたいだな。…お前玄関でぶっ倒れてたぞ。」

「そういえば…ありがとうございます。…運んでくださって。」

「俺じゃなくてスペインに言え。」

「あ…はい。」

（優しいんだか無愛想なのか…よくわからない人だな…。）

よく考えれば、私風呂に入っていないや…。

若干アルコールの匂いもするし…。

（はあ…情けない。）

「あの…私シャワー浴びてきますね。」

そう言って立ち上がろうした時：

フラッ

足がもつれてバランスが崩れそうになった。

「Σうわっ！」

ガシッ

倒れそうになった私を支えてくれたのは：ロマーノさんだった。
ロマーノさんは転びそうになった私をキャッチした。

：端からみれば抱かれている光景だ。

自分の顔が赤く染まるのが分かった。ロマーノさんの方を見上げると、彼も顔が紅潮していた。

「あわわっ：すっすみません！」

あわてて彼から離れると、その足で脱衣場まで行った。

脱衣場の中に入っても、顔は赤いままだった：。

風呂からあがると美味しそうな香りがした。

台所にはロマーノさんともう一人。茶色の髪で癖っ毛が増えていた。

「おっ！美優ちゃん！はじめまして^^俺の名前はスペインや。よろしゅうな☆」

「あ：はじめまして。」

「ちようど今朝ごはんが出来たで。美優ちゃんも一緒にたべよ^^」

そう言うときスペインさんは太陽のように笑った。
その笑顔に私は癒された。

「おい、スペイン。足りないぞ、コノヤロー。」

「はいはい。」

「…お前も早く座れ…コノヤロー…。」

「は…はい。」

それから、私は初めて誰かと朝ごはんを食べた。こんなに美味しい朝ごはんは初めてだ。
二日酔いもいつの間にか感じなくなっていた。

「あの…一つ質問して良いですか？」

さっきから気になっていた事を思いきって聞いてみた。

「なんで…お二人の名前が国名なんですか？」

二人の手が止まった。

「…美優ちゃんは…何も知らんと俺らの学校に入るつもりやったんか??？」

「えっ?」

「たっく…あの腐れ親父。説明ぐらいしとけっつーの。」

「こらっ!!…すまんあゝ。こっちの話やさかい、気にせんとつてな☆」

「はい…。」

「まず、俺らは人間やないんや。俺らはないわゆる『国の化身』なんや。その国が生まれた時に、俺らも産まれ…滅ぶときに一緒に消

える。まあ、たまに例外もあるけどな☆」

「各国の化身が集まった場所。それが、お前が明日から通う『世界W学園』だ。」

「えっ？ そうなの？」

「お前：目の前にあるのはなんだよ。」

よく見ると、私の皿の向こうには昨日読んでいたパンフレットがあった。しかも、二人の着てる服もよく見たら制服だ。おそらくW学園の制服だろう…。

「まあ、詳しい事はそこに書いてあるさかい☆他に質問は？」

「んー…あっ！ 学校ってどこにあるんですか？」

「太平洋のど真ん中やで。」

「へえ…太平洋…：…ってえええええ！？ どこ！？」

「せやから太平「いや、わかってる！！！」」

までまで。落ち着け私。太平洋ってどうやって行けば…って、そもそも通える距離じゃ…つかまず、海だし！！！！

「あー…美優ちゃん？ なんか誤解しとるようやけど、学園は全寮制やから。」

「あ…なら安心…：…じゃなくって！…全寮制って事は、私は…引越す…んですか？」

「まあ…そうなるな。」

どうする、私。

ここにいたら、あいつらに金を巻き上げられる。おまけに暴力。二日酔いの餌食にも…。

普通の人生を送るんだろ…？

「どうする？」

ロマーノさんの声で我に返った。

答えは当然…

「…行きます。いや…行かせてください！！！」

私は生きる。

予期せぬ朝（後書き）

※作者はこんな乙女じゃありません！！

自分で書いてあれですが…美優ちゃん乙女すぎだろうが！
作者に乙女を無理やりつけるとするならば…それは多分…

『ガサツ乙女』

…です。

ちなみに、一応ロマーノ的には親切なつもりです（^| ^）

しかし…まあ…美優ちゃんが倒れそうになったところ…ギャルゲー

（？）乙ゲー（？）だったら、一種のイベントですね（笑）

…と作者は思っていました☆

空と涙と太陽

「よしっ！ほんなら、早く食べて早速出発や☆」

「そういえば、どうやって行くんですか？」

「横浜に船が停泊してるからそれに乗るんだ。」

「へえ：なんか凄いなあ。」

それから私は、スペインさんが作ってくれた料理を食べた。

トマトがたっぷり入ったパエリアだ。初めて食べたが凄く美味しかった☆

「美優ちゃんはよう食うなあ。親分頑張ったかいがあったわあ。へ」

「そうかな？」

（まあ：今までが今までだったからな：。）

朝ごはんが終わると、私は早速荷造りをした。：といっても、旅行鞆一個と段ボール一個分だからすぐ終わった。段ボール中も、大したものが入ってない。今まで使っていた教科書やノートぐらいだ。ロマーノさんが、「服とかは持っていないのか？」と聞いてきたが、私は黙って首を横にふった。

私の持つてる服といえば、中学の制服と体操服ぐらいだから：。私服なんかほとんど持ってない。ここにある服は全て母親の服だ：。そして私は今中学の制服を着てる。もちろん（？）セーラー服だ。：スペインさんがなんか変な目で見てるけど：あえて気づかないようにした。

「荷物…持ってやるよ。」

ロマーノさんが旅行鞆を持ってくれた。

「おっ！なんやロマーノ。今日はやけに素直やなあ☆」
「うっせえー！！」

スペインさんが段ボールを抱えながらロマーノさんを茶化した。

（仲良いな…この二人。）

二人が先に出て、私は最後に出た。外とドアの境界線。私は一度立ち止まった…。

…この部屋には良い思い出は全く無い。あるのは…思い出したくないものばかりだ。幼い頃はこの部屋が全てだ。母親に支配された世界…。全てを奪われた世界。

でも今は…全てが解き放たれようとしている。

（私は…自由になるんだ。）

そう考えると、何故か目から涙が溢れてきた。
一粒。また一粒。
頬を涙がつたう。

（駄目だ…。泣き止まなきゃ。）

ポン

スペインさんが私の肩を叩いた。

「泣きたいときは無理せんでええ。おもいつきり泣きい。親分の胸の中でな☆」

太陽のように笑った彼は、とても輝いて見えた。

私は素直に彼に抱きついた。抱きつく私に答えるように、彼も優しく抱きしめた。

…初めて…誰かに抱きついたし、抱きしめられた。

彼の腕の中で、私は大声で泣いた。

まるで、産まれたての赤ん坊のように…。

「いつまでくっついてんだ…てめえら（怒）」

ロマーノさんが怖い顔をしてこっちを睨んだ。

「Σあっ!!」

「たっく……はい。」

ロマーノさんは私にハンカチを差し出した。

「あ…ありがとう。」

渡されたハンカチで涙を拭き取ると、今度は足元を見た。
そしてゆっくり、前に踏み出した。
前を向くと二人が微笑んでいた。

「よろしく、美優ちゃん☆」

「よろしく。……美優。」

偽りのない笑顔で…

「よろしくお願いいたします。ロマーノさん。スペインさん。^^」

空が青く高かった。

空と涙と太陽(後書き)

親分――！！！！！！！！

親分はいいよお。

関西弁はいいよお。

方言萌え☆／(＾p＾)／

やっと親分にもラブフラグが立ってくれたよ…。

西「なんやと！？俺は初めて見たときから惚れとったで！！」

Σあらっ！(□)！！

親分何しに來たの！！

西「作者がなかなか美優ちゃんに『親分☆』って呼ばせないから抗議にきたんや！！」

…えへっ(＊＾・＾＊)
忘れてた☆

西「Σなんやと(□)；！！」

まあ落ち着け(ω₁)
そのうちやっとかから。

さて次回は…「Σちよっ！！まちi(殴)…えっ??」

南「お騒がせしました。」

(^| ^;) {⋮}

さて次回は!!

(作者は得意のスルースキルを発動した☆)

いよいよ船に乗るよ!

夜明けと潮風

荷物を詰め込み、乗り込もうとした…その時だ。

「まてごらあああああ!!!!」

車の後ろから来た強面の集団。…あいつらだ。

「よう、ねえちゃん。これからお出かけかい？ いいご身分だなあ。え？ 借りた金も返さんとかい？ …ハッ。」

一人が近づいてきた。足が石のように動かない。そいつは耳元でささやいた。

「…大人なめんじゃねえぞ。」

…顔が青冷めるのがわかった。

（嗚呼、私は永遠に自由になれないのか…。）

絶望を感じたその時だ。

「おい、にいちゃん。うちの今すぐその子から離れえやボケ。」

「ああ？（怒）」

「離れえゆうとるんが…聞こえないか!!!!」

バキッ

スペインさんが私の耳元にいたやつに、右ストレートをかました。

私が驚いて、呆気にとられてると…ロマーノさんが「早く乗れ。」と言ったので、私は車の後部座席に座った。

ロマーノさんは運転席に座り、スペインさんはあらかた終わると、すぐさま助手席に座った。

後ろからは追っ手は来なかった。

「はぁ、びっくりしたな！」

「すみません。あんなことになるなんて…。」

「大丈夫。あれは俺から売ったケンカや☆美優ちゃんは気にせんでええ♪」

「…聞かないん…ですね。何があったとか。」

しばらく車内には沈黙が流れた。

「…別に…美優ちゃんが言いたくないなら、それでええよ。なっ、ロマー♪」

「おう。」

「いつか言いたくなったら言えええよ。」

「…優しい…ですね。二人とも。」

心が温かく感じた。

「そや！美優ちゃん。…お近づきの印と言っちゃあれやけど…俺のこと『親分』って、呼んでくれへんかな？」

「え…何故に？」

「親分なみんなの親分になりたいねん！」

（…どうしよ…この人。）

「気にするな。いつもの癖だ。俺も呼んでねえから。」

「あっ…いえ…。いいですよ。呼んでも。さっきのお礼です^^」
「ほんまか!? やったー☆あっ! 俺らのこと、ため口でええよ☆」
「うん。わかった^^」

それから約2時間。高速でおもいつきり飛ばし、昼の12時にはもう横浜の港に着いていた。

「う…うう…。」

高速に乗ったためか、二日酔いが戻ってきた…。

「大丈夫か?」

「なんとか…。」

親分に支えてもらいながら、車の外に出た。潮風がきもちい。
この場には私と親分しかない。ロマーノさんは船に車を入れに行ってる。

ふと、親分の腕を見ると右肘から血が出てる。

「親分! 血出てる!!」

あわてて鞆から絆創膏をだした。

「大丈夫やよ。これくらい、擦り傷やから…。」
「でも…私のせいで…。」

シュンとなっていると…

なでなで

親分は私の頭をなでた。

（撫でられるって…こういう感覚なんだ…。）

「美優ちゃんは優しいなあへけどな、さっきも言うたけど…無理せんでええんやよ。わがママを言うたってええ。泣きたいときは泣いたらええ。笑いたいときはおもいつきり笑い。そうせんと、体もたんで☆」

「親分は…私の過去を知ってるの？」

「いや。知らん。親分が知つとるんは、美優ちゃんの名前だけや。それは、ロマもそうやし、これから会う奴らも美優ちゃんの名前は名前ぐらいしか知らんよ。せやから…自分の過去を気にするな。みんな『桂木 美優』という一人の人間が知りたいんや。」

（親分…。）

親分の発する言葉のひとつひとつが、私の心の暗い闇を照らした。まるで、暗闇を照らす太陽のように…。私の中に夜明けがきた。

「おーい！早く入ってこい、コノヤロー！！」

船の甲板からロマーノさんが手を振る。

「おー！美優ちゃん、はよ行こ♪」

親分が歩き出そうとしたとき…

クイツ

私は親分の袖をつかんだ。

親分は何事かおどろいたが、私は言った。

「あゝありがとう。親分。」

少し照れながら、親分は「どういたしまして☆」と言い、私の手を引っ張った。

そのまま二人で船の中へと入って行った…。

夜明けと潮風（後書き）

今回は親分と主人公がイチヤイチヤしてますね…。

（おい、親分そこ代われへ言へ）

おそらく、今後は主人公にとって親分は心の支えになるでしょう。

三人がこれから乗る船はふつうのクルーザーより少し大きいです。
イメージは、客船と大型クルーザーの間。…まあ、けっこう大きい船です。

（さすがというか…。）

船の名前は「夢路」。

（今考えた☆）

船内は完全個室です。

次回は主人公が可愛くなるよ♪

夢への海路

ザザーン…

私達を乗せた船『夢路』はゆっくりと、目的地である『カプカ島』へと着実に進んでいた。

私がこれから通うW学園自体は一つの島だが、実際は2つの島でできてる。一つは学園でもう一つ、数メートル離れてる島は元々住んでいた島民の生活区域。それが『カプカ島』。

マーシャル諸島に属するほぼ無人島に近い島だったらしいけど、七年前に学園の理事長である西園寺家が買収。学園の建設に伴い島は経済的に急発展。懸念されていた環境問題や経済格差も今のところ問題無い。

島の主な交通手段は電車、電気バス、車など。車関係は全て電気。発電所も水力、風力、太陽光。まさしく、環境に優しい島だ。

島は山を中心とした4つの区域から成っている。

南は商業区。東は別荘区。西は娯楽区。北は居住区。

近年では、各界の有名、著名人がパパラッチ等から逃げるため、別荘を建ててる。理由は、島自体が安全で美しい島なのもあるが、すぐ隣が普通の人とは一線を画した人達が通う学園だけあって、外部からの侵入が厳しい。

そのかいあってか(?)、島には地元店から有名店まで並んでる。(…こんな凄い島なのに、一般人には絶対に知られていないとか…皆さん必死なんだな。)

私はデッキで、学園のパンフレットを読みながら、潮風に当たっていた。

「美優。ちょっといいか？」

声をかけてきたのはロマーノ。

「え？ うん。わかった。」

トテトテとロマーノの後についていくと、連れてこられたのはラウンジ。

そこのソファアーに座っていたのは、一人の黒髪の青年。顔立ちが日本人っぽいので、おそらく…

「…日本の方ですか？」

「正解です。私は日本。貴女の祖国です。よろしくお願いいたします。」

彼が頭をさげるので、私もあわててさげた。親分が「はよ座りい。」と言ったので、私は二人掛け用のソファアーにロマーノと座った。

「はじめまして。桂木美優です。美優ってタメ口でお願いします。」

「わかりました。美優^^敬語は私の癖なので、せめて名前だけ。

私のこともタメ口でお願いいたします^^」

「うん♪わかった^^」

「それで…さっそくですが…美優。学園のパンフレットと一緒に白い封筒はありませんでしたか？」

（ドキッ！）

「うん…あったよ。」

「それは今どちらに？」

「…部屋の鞆の中…。」

私は緊張しながら、鞆の中にある封筒をだした。

「中身は？読みましたか？」

私は首を横に振った。

なんとなく、本能でわかっていた。この手紙の内容。この手紙がこれからの…私の人生を大きく変えることを…。

それ故に、なかなか手紙を開けなかった。

「読むのが怖ければ、今は良いですよ。決心がついたら読んでください。」

日本は真っ直ぐに、優しい瞳で私を見た。
満天の星空の色の瞳だ。

「日本は…中身を知ってるの？」

「…はい。そして…貴女が何者かも…。」

（私が何者か？？）

「さあ！それはそうと…美優。貴女に素敵なプレゼントがありますよ♪」

（あれ？なんか誤魔化された！？）

先ほどのまでの重い空気を変えるように、日本はイキイキとした表情で私達をある部屋へ連れて行った。

ガチャッ

扉を開けるとそこにあったのは沢山の制服。

どれも同じようなデザインだが、一つ一つ微妙に異なる。

「うわー！！かわいいくくく」

「此処にある制服の全ては日本がデザインしたんだ。」

興奮する私に付け足すように説明をしてきたのはロマーノ。

一方の親分は、私より先に制服を選んでいた。「こっちなんか美優にどうやろ♪」「美優でしたらこちらの姫系のデザインも似合うと思いますよ♪」なんて、日本と楽しそうに話してる。

（私は一体どんな服を着せられるのだろうか：（汗））

一抹の不安も感じながらも、私はロマーノと一緒にその様子をほのぼのと眺めていた。

———数十分後：———

「…どう…かな／＼／＼」

散々親分と日本が悩んだ挙げ句、埒があかないのでロマーノが全身コーデしてくれた。

（まあ二人に任せたら少し不安だったからよかった…。）

私が着せられたのは、肩がふわっとなってフリルがついてる白い半袖ワイシャツ。襟にもフリルがついてる。胸ポケットには可愛い校章つき。ネクタイとリボンが選べたので細いリボンにした。スカートは二段階になってる。太ももまで短い…。日本曰く「絶対領域は必須です（キリッ）」らしい…。靴下は黒。靴はローファー。（なんと靴まで用意されてた!）

そんなお姫様風コーデを見た三人はと言うと…

「ハアハア…美優ちゃんめっちゃかわええ…／＼／＼」

「美優!…こっち向いてください!! ハアハア…良いです…さすが嫁／＼／」

…カメラを構えて変態発言多発してる二人はおいといて…

「どうかな?…ロマーノ／＼／」

「Σえっ…あ…うん…。似合ってるぞ…コノヤロー／＼／」

下を向いて真っ赤になるロマーノを見てると、なんだかこっちまで恥ずかしくなってきた。

「美優×ロマーノさんですか。新大陸発見です!!」（φ（ー（
）

「Σちょっと；日本何メモってるの!？」

「どうぞお気になさらず。今回のネタにS（殴

「Σえっ!??」

「いえいえ。こちらの話。」

日本のキャラが見えなくなった瞬間だった…。

「それにしても、さすがロマーノやなあゝVV美優をこんなにもばっちり可愛くするなんてなあゝ! 親分びっくりやわ☆」

「フン。…元からこういう作業は得意なんだよ。アイツは作るほうだけど…それを使いこなすのは断然、俺の方が上だ。」

「アイツ?」

「ロマーノさんの弟のヴェネチアーノさんですよ。」

「俺が南イタリアで、アイツが北イタリアなんだ。俺らイタリアは二つで一つだ。」

「弟のイタちゃんもなあゝめっちゃかわいいんやでえゝVV学園に着いたら紹介したげるわ!!」

「うん!」

(どんな人なんだろう。)

———夜

風呂上がり。

私はネグリジェにカーディガンという簡素な格好でデッキの手すりにつかまり、海に映る満月を見ていた。(部屋に用意されてたよ

！)

漆黒の闇の中で神秘的に現れる月。その美しさを引き立てる煌めく星達。微かに聞こえる波の音。

そこだけがまるで宇宙空間の様だった…。

「綺麗だな―…。」

月を眺めて呟いた。

(最近…どんどん、自分の周りが変わってゆく…。)

元から普通の人生じゃなかった。恵まれない最悪な人生だった。むしろ、それが当たり前と感じていた。

こんな風に幸せを感じるのはあまりなかった…。

学校では母のせいで友達は出来ず…それでも、幾分か家よりはましだった。

昔は私は母が大好きだった。蹴っても殴られても…いつか愛してくれるって…信じてた。もしかしたら、今も心のどこかで思っているかもしれない…。

でも…

ビュン

突然海風が吹いてカーディガンが飛んでいった。

(蝶のタトゥー!!)

「美優？」

ギクッ（。。；）

カーディガンが飛んでいった先に立っていたのは…親分だった。

夢への海路（後書き）

今回は長文です！

読んでくれた方…感謝！！

にしても1ヶ月ぶりの投稿です☆

えっ？

どうして夏休みは全く投稿しなかったかって？
簡単だよトソンくん。

…携帯を落としたからさ（泣）

てな訳で最悪な夏休みでした…。

まあ今はもう携帯新しいの買ってもらったんだけどね☆

カプカ島の説明については完全にフィクションです。

私のあったらいいなこんな島みたいなWW

でも…あったらいいですね…こんな夢のような島…。なんてったって隣はW学園だから☆

さてさて、ヒロインまさかのピンチですっ！

（…ω…）キリッ

こうご期待！！

迷いと感謝

カーディガンが飛んでいった先に立っていたのは…親分だった。

（っ…親分…。）

苦虫を踏み潰したように、私は顔をしかめた。

そんな表情を知ってか知らずか、親分は自分の足元に飛んできたカーディガンを拾い、私に着せた。

「こんなところで、そないな格好しとったら風邪引くで。」

そう言うのと、親分は私の隣に立って一緒に月を眺めた。

「また何も聞かないんだ…。」

「言うたやろ。言いたくなったら言えばええって☆」

そう言って親分はまた私に太陽のような暖かい笑顔を見せてくれた…

（優しいね…親分。）

私はゆっくりと微笑んだ。

「さあ。こんな夜中まで起きると、明日の朝辛いで。はよ、中入ろ。」

親分が中に戻ろうとしたので、私は中に入った。

「部屋まで送るで。」って言うてくれたが…断っておいた。

少し考え事したかったから…。

本当は私、あの時親分に言おうか迷ったんだ…。自分の過去の事。でもね…言えなかった。軽蔑されたり、嫌われたりしないか怖いんだ。結局、私は親分を信用してないし、過去の自分と向き合うのが怖いんだな…。

ねえ…親分。いつか私がちゃんと過去と向き合えるようになったら…真っ先に教えるね…。

心からの感謝を…。

（親分 side）

明日の予定を教えるために、美優の部屋まで行っただが、応答はなかった。

（あれっ？どこ行ったんやろ？）

夜も遅いので、少し心配になった。

あちこち探した結果、見つけたのは、昼間美優がくつろいでいたデッキ。

湯上がりなのか、セーラー服ではなく、ピンクのフリフリのネグリジェだ。頬も赤く高潮し、まだ生乾きの髪で少し、色っぽく見えた。

満月を眺めるその姿は、昼間の幼さはどこかに消え、対象的に艶やかさが表れた。更に、薄暗いデッキで頼りになる灯りは月光。息を飲めば、そのまま消えて泡となりそうに神秘的だった。

ビュン

海風が吹いた。

美優の肩にかかっていたカーディガンは風に飛ばされ、俺の足元に落ちた。

美優はこちらを見てかなり驚いていた。

それもそうだ。

俺の目に入っただのは、美優の右の肩に乗る蝶。

美優はあわてて隠したが、観念したような目でこっちを見た。

俺は少し驚いたが、以外とショックはなかった。それもそのはず。初めて会ったあの時、美優をベッドまで運んだあの時…もう既に、俺は見たんやから…。

当の本人はそんなこと知らんから、気まずそうな顔をしたままだ。俺はとりあえず、足元に落ちたカーディガンを拾い、美優に着せた。

美優は、「また何も聞かないんだ…。」なんて言って、落ち込んでいる。とりあえず、「言うたやろ。言いたくなったら言えばええって☆」言って笑った。

言いたくなったら言えばええなんて嘘。偽善を押し固めたただの自己満足の言葉にすぎん。

それでも、コレだけは言える。

（俺は…美優の悲しい顔だけは見たくない。）

美優は俺の笑顔を見て、ゆっくりと微笑んだ。

出会って数時間しか経ってないけど、俺は確信した。

俺は…美優に…恋に落ちた。

（一目惚れってこんなもんなんな…。）

二人で中に入り、部屋まで送ったろ言うたけど…美優は断った。
俺も、あまり深く干渉せず真っ直ぐ部屋に戻った。

なあ…美優。

俺はな、お前の悲しい顔は見たくないねん。苦しい顔も辛い顔も
…見たくないねん。

見たいんは、お前の幸せそうな顔だけ。

俺がずっとお前のそばにおったら…お前は幸せか？

なあ…美優…。

迷いと感謝（後書き）

親分惚れたな…とうとう。

このままだと「親分ルート」まっしぐら…。

…んーそれはなあ。

芸がないていうか…なんていうか…ゴニョゴニョ。

何はともあれ次回もお楽しみに☆

ありがとう

翌日午前12時。

「うゝっ…着いたああ!!」!

日本から約1日半。私達は、赤道近くの島『カプカ島』にたどり着いた。

船はとりあえず、商業区のある島の南側に猪狩をおろした。

商業区である南側は、大衆向け的大型店からブランド店、地元店まで様々だ。港近くの方は、道も整備されビルが建っていたりする。街並みは至って近代的だ。大通りに面した街並みは、どこことなくヨーロッパ風の建築様式を思わせる。

「マーシャル諸島は元々スペインの領土だったんだ。」

段ボールを抱えながら降りてきたロマーノは、近くのベンチに座り説明を続ける。

「1529年にスペインの家の奴が初めて接触をしたが…1788年にイギリスの家の奴が探検。1899年にはスペインからドイツに売却。WW2の後には国際連合の信託統治領になったんだ。」

「ええ?? し…しんたく…とおじ??」

「…お前そんなことも知らねえのかよ…。」

「Σ知るわけないでしょ!!!!」

ため息混じりにロマーノは説明してくれた。

（つか、知らなくて当たり前なのは…。）

「信託統治ってのは、国連の信託を受けた国家が国連の監督のもとに、統治を行う制度だ。自治、独立に向けて発達をする。…まあ、今はもう信託統治領なんて無いがな。」

「へえー、詳しいね…ローマーノ。」

「当たり前だろ。俺だって『イタリア』だ。…この島は、中でも一番ヨーロッパの文化に影響を受けた島なんだ。」

「あゝ…だからどこことなくヨーロッパの感じが…。」

「学園ができたのは7年前で…それまでは、島民も100人前後の島だったんだぜ。」

「あっ！！パンフレットに書いてあったよ！！…でも、こんなに素敵な島なのにそれまで無人島同然だったなんて…信じられない。」

「世界中に無人島なんて星の数ほどあるからな。俺達も、いちいち確認してやれるほど暇はねえんだよ。」

（ふう…ん。…国って大変なんだ…。）

ローマーノの説明に感心していると、いつの間にか何処かに行っていた日本と親分が二人の女の子を連れて、私達のいるベンチに近づいて来た。

「お待たせして申し訳ありません。少し人探しをしました。」

「ううん。大丈夫。今ねローマーノにこの国と島について教えてもらってたから♪…そちらの方達は？」

一人は、ロングヘアの茶髪に黄色と緑の中間的な色の瞳を持った、私より2〜3?高い優しそうな女性。ピンクの髪飾りがよく似合う。ワイシャツは私のやつからフリルをとったもの。スカートは赤のタータンチェックの柄をした普通のスカート。赤いスニーカー

が可愛い。リボンではなく、ネクタイなのもよく似合っていた。

もう一人の子は、肩までのおかっぱ風の髪型に金髪の柔らかそうな髪。瞳の色は透き通るような緑だ。背は逆に2、3？低く、右側にリボンをつけてる。制服は私のと同じデザインだが、リボンは大きくて白いフリルのついた、かわいらしいデザインだ。

（うわーっ！可愛い女の子達！この子達も国…なのかな？）

「こちらの髪の長い方が『ハンガリー』さん。そのお隣が『リヒテンシュタイン』さんです。」

「はじめまして。桂木美優です。呼び捨てとタメ口でお願いします☆」

私は軽く会釈をすると、二人は少し戸惑いながら会釈をした。その行動に少し違和感を感じた私は、以前学校で聞いた話を思い出した。

「あっ！すみません…欧米の方って、挨拶は握手でしたね…。」

慌て謝ると、ハンガリーさんが笑いながら、「うふふ♪大丈夫へ日本と会う時はいつもこうだから。」と言ってくれた。

「それじゃ…改めて。はじめまして。私はハンガリー。一応女子寮の寮長だけど、気軽に『ハンガリー』って呼んで♪私もタメ口でお願いね☆」

「私は長いので『リヒ』とお呼び下さいまし♪私は言葉使いはこのままなので…せめて、私のことはタメ口で…^^美優様の隣の部屋なので、お気軽に遊びに来て下さいまし。」

二人とも優しそうな人で、とりあえずひと安心した。

その後、日本達は私の荷物を持って先に学園に向かった。

私達は、軽く昼食をとった後、いろんな生活用品を準備しに大型店に向かった。

お金は、この島自体は別にあるが、学園の生徒はICカードで払えるとのこと。月一回のお小遣いやテストによるボーナスが支給は全て、この中に換金されるらしい。また、個人情報やパスワードもこの中に入ってる。

「アメリカが作った最新式のセキュリティシステムらしいわ。」
「学園の内外でもよく使いますので、持ち歩いた方が便利ですわ。」

先ほど、ハンガリーからもらった自分用のカードを眺めながら、私達は雑貨屋でカード入れを探していた。

中には約500ポイント入っているらしい。

(ちなみに1P≡100\だよ☆)

転入祝いとして、日本円で約5万円入っているらしい…。

(こっ…この中に…5万円!!!)

(。□。;) ワナワナ

初めて持つ大金に浮き足気味の私でした☆

可愛いカード入れを買った後、文房具や消耗品、服や生理用品など買った。

(文房具や消耗品はともかく、生理用品は女の子同士の方が買いやすいよね)(汗)

私服をセーラー服と体操服以外に持ってないと言うと、二人は楽しそうに、私に服を選んでくれた。

女の子同士でこんな風に、お洋服を見てまわるのは初めてで…なんだかとても楽しかった♪

（よくよく考えると…私女友達っていなかったんだよね…。）

学校では、女子達のかっこうの噂の種にされ…中学ではイジメもあった。

でも…今は……

「美優！これ見て！可愛くない？こっちのスカートとあわせて着てみて♪」

「こちらは部屋着用にいかがでしょう？とても可愛いですわっ！！」

二人が私に服を手渡す。

私が選んでいる間にも、二人とも真剣に服を選んでいる。

（ありがたいな…こんな風に選んでもらえるなん…て…。）

ポロツ

「Σええ！？…どうしたの？美優！…その服…趣味に会わなかった？」

「ふえ？全然！！むしろ可愛いし、私好みだよ！！」

「では…どうして泣いてるのですか？」

（えっ？）

二人に言われて初めて気がついた。

私は…泣いていたのだ…。

「…うん。…ただね…私…幸せだな…って。」

泣いているけど…私確かに、今幸せだ…。

「ハンガリー、リヒ…私と…お友達になってくれますか？」

泣くのをぐっところえ、私は二人にお願いした。

「…何言ってるの？」

ハンガリーは私をふんわりと、抱きしめた。

「私達は、もう…友達よ^^」

「そうですわ^^」

その言葉を聞くと、目から涙が止まらなかった。

ちゃんと伝わったかわからないが…私は涙声で二人に伝えた。

「ありがとう。」って…。

ありがとう（後書き）

ヒロインに女友達ができ、親（？）としては非常に安心しました。ヒロインは、あんな性格なのでつつい周りから一步離れてしまうわけなのです。

母親のこともあるゆえに、迷惑のかからないようにしていると、逆にイジメのターゲットになったという…。

優しいが故の現実。

心優しいヒロインにとってみれば、悲しい出来事出来事です…。でも、そんな過去もハンガリートリヒの登場によりヒロインのこれからの人生は180。大きく変化するでしょう。

二人の登場により、今後の運命が見所です。

幸せと悪夢（前書き）

再投稿です♪

幸せと悪夢

夢を見た。

真っ暗な空間に誰かと二人っきり。

よく見ると、一緒にいたのは幼い頃の私。

ジーっと私を見ている。

その瞳は…恨み…妬み…嫉妬…悲しみ…全てが詰まっていた。
顔にはたくさんのお痣がある。肩からは…血が流れていた。
体は細く骨と皮だけ。服もぼろぼろだ…。

その子はゆっくりと口を開いた。

「幸せになったら…クロス。」

ガバッ

…そこで夢が終わった…。

いや…正確には『終わらせた』。

枕元にある新品の目覚まし時計は、まだ4…00を差してる。

（なんだったの…あの夢…。）

『幸せになったら…コロス。』…そう確かに言っていた。

寝汗も酷く、一度シャワーを浴びにバスルームに向かった。

私の今いる部屋は、学園内にある女子寮『白花寮』のとある一室。
私の部屋だ。

寮はそれぞれ学園とは独立した、搭になっており、搭の中はエレベーターで移動するようになっていいる。

一つの階に四部屋。最上階は談話室だ。

各部屋に、トイレ・シャワー・洗濯機・エアコン・冷蔵庫付き。
インターネット回線も完備。テレビだって、24時間世界192カ
国のテレビ番組が見放題。

内装は、ホテルのロイヤルスイートルーム並。とにかく豪華！！
無意味にある絵画とか花瓶とか…部屋を整える調度品は、シックで
上品だ。

アメニティグッズは初めから用意されており、バスタブは白い大理石だ…。

バスタブに湯をはるまで時間があるので、小さい冷蔵庫にある水を飲むと、さっさとバスルームに向かった…。

コンコン

「美優〜！朝よ〜！」

ハンガリーの声で目を覚ますと、時刻は朝の7…00。
服に着替えるのが面倒で、そのままベッドにダイブしていた。
(ちゃんとバスローブを着てるよ☆)

「は〜い…今開けるう〜。」

ガチャ

「おはようって…何その格好!!」

「ああ…これは「最高じゃないっ!!」って…はい!??」

ハンガリーは鼻を手で抑えながら、カメラで写真を撮ってる。

(あれっ?もしかして…ハンガリーって…日本と同じ属性?)

「はいはい;たく…ハンガリーちよつと落ち着きな。」

ハンガリーの持っていたカメラを取り上げた、のは金髪で癖っ毛の猫みたいな女の子。

「はじめまして☆ウチは『ベルギー』や^^みんなウチの事『ベル』って呼んどうから♪敬語はいらんで!よろしゅうな♪」

「はじめまして^^桂木美優です。『美優』でお願いします♪」

（明るい人だな…。）

ハンガリーとベルの話によれば、日曜日はstudent hallは閉まっているので、各々自炊か食べにいくそうだ。

ここで一つ疑問に思った。

（student hallって何！？）

「ああ！student hallっていうのは、学園の朝、昼、夜の食堂と、全校集会場を兼ねてる、広い建物よ。」

「時間外には談話室になったり、クリスマスとかのイベントにはここで、パーティーとかもするんやで♪」

（へえー…学園もなかなか粋なことするなあ。）

二人は下のロビーに学園の女子全員を呼んでるから、8：00になったら来てほしいとのこと。

昨夜はいろいろあって疲れてそのまま爆睡してしまったので、今日は女子だけで歓迎会を開くらしい。

二人が部屋を去った後、私は昨日ハンガリーとリヒに見立てもらった服達を取り出し、齒を磨きながら選んだ。

この島は亜熱帯に属しているので、年中高温多湿。たまに雨期と乾期があるくらいだ。

というわけで、私が選んでもらった服は全て半袖。

（まあ、楽だから良いんだけどさ☆）

私が選んだのは、黒いタンクトップの上に白と黒のギンガムチェックのキャミワンピース。お揃いで黒地に白のドットのサンダル。カバンの中に必要ものを入れると、ドアを閉め、ICカードを挿して、ロック完了。

（ホントこのカード万能だな…。）

なんてことを考えながら、はや歩きでエレベーターに向かった。

チーン

ロビーには10人ぐらいの女の子達が集まっていた。中には12才前後の少女も混ざっていた。

（あの女の子も国なのかな？）

すると、ハンガリーがこちらに気づいた。

「あら！美優！凄い！時間ぴったり！さすが日本人♪」

最後の日本人の部分はスルーした。

ハンガリーがロビーにあるソファアーにみんなを座らせると、改まった口調で口を開いた。

「知ってる子も多いと思うけど…昨日から我がW学園の生徒となっている『桂木美優』よ。」

「はじめまして。桂木美優です。」

「美優は私達と違って人間だけど…みんな仲良くしてね☆」

ハンガリーがそう口添えすると、至るところから『もちろん』の声が聴こえてきた。

（よかった…。）

とりあえず、ひと安心した。

ハンガリーとリヒ、ベル以外は自己紹介した。

胸の大きいショートカットのウクライナさん。『ライナさん』。
その妹で、髪の長いお兄さん大好きなベラルーシさん。『ベラちゃん』。
メガネをかけた知的少女系なモナコさん。『モナコちゃん』。
南国的なオーラをもつセーシェルさん。『セーちゃん』。
芯の強そうな面影をもつベトナムさん。『ベトさん』。
ふわふわとした梅の髪飾りを付けた台湾さん。『湾ちゃん』。
眉毛に若干特徴のある可愛い少女のワイさん。『ワイちゃん』。
一通り自己紹介が終わったところで、私達計11人は予約してあるというレストランに向かった。

（私服で来てよかった…。）

学園のある島とカプカ本島をつなぐのは、唯一の連絡橋。『da

w n b r i d g e 』。学園側と本島側には、関係者以外通れないように、音声・指紋・パスワードの三重ロックになってる。まあ、パスワードを忘れたらICカードをスキャンすれば大丈夫らしい。

（それって三重ロックの意味が無いのでわ：（^| ^；））

何はともあれ、私達11人は目的地のレストラン『crescent』に足を運んだ。

幸せと悪夢（後書き）

補足..この日は日曜日なので、皆さん私服です♪

服装は、大抵皆さん半袖系です^^

あとは、思い思いの服装をイメージしてくれれば幸いです☆

三日月にて

インターナショナルレストラン『crescent』。日本語訳『三日月』。世界中の料理が食べられるのがウリだ。学園の生徒はよくこの店を利用するらしい。

朝の時間の今は、世界各国の朝ごはんがbuffet形式に並んでいる。

朝のラッシュが終わった今は、店にいるのは、観光客の金持ちのマダムやお忍びで来てる映画スター等だ。

そんな凄い光景を目にして、一般人の私のテンションが上がらない訳が断じて…無い!!!!

(・ω・´) キリッ

「ちょ…ちょっと…リヒ。あそこのカウンターにいる人ってハリウッド女優の人だ…よ…ね!?!」

「はい。」

「あっちのテーブルは…韓流アイドルの人達よね!!」

「はい。」

「テラス席にいるのは…パリコレのモデルの人!!!!」

「はい。」

私の異常なほどのテンションに対して、リヒはただ…頷くだけだった。

一方、私は目の前にいる各界の有名、著名人を見てリアクションするのに精一杯だった。

「ハイハイ。リヒちゃんも美優も、はよテーブルに移動しようなあ

」。

ベルが私達二人を回収したところで、いよいよ歓迎会が始まった。

「それでは！我がW学園の新たな仲間となり、数少ない女子の一員となった美優の歓迎会を開きます！！……せえーのっ！！！」

『カンパイ！！！！』

配られたグラスを持って、乾杯をした。

「美優ちゃん趣味は何？」

「好きな食べ物？」

「好きな国は？」

乾杯と同時に、私は質問攻めに合った……。 (。▽。 ;ノ)ノ

「えーっと…趣味は特に…食べ物もこれといって…国は…他の国をあまり知らないからな…。」

質問よりも、私の視線は先ほどから料理の方に向きっぱなしだ。

(あの料理早く食べたいな…。隣のやつも美味しそう…。)

初めて見る料理の数々に、私は目を輝かせた。

一方、周りの可愛い女の子達は…

（（何この子…さっきから料理ばかり…可愛い！！！！））

と…私の知らないところで、勝手に癒されてたことを私は知らなかった…。

女の子達は、あまりにも私が見つめていたからだろうか…すぐに質問攻めを止め、私はすぐさま料理の方に駆け寄った。

女の子達は、自国の料理を薦め、私はその全ての料理を堪能しました☆

（うん♪美味しかった☆）

初めて食べる料理ばかりで、朝ごはんにしてはかなり豪華だったけど…美味しかったのでナシにした☆

その後も、和やかな会食は続いたが…

（??? side）

和やかに歓迎会が開かれてるテーブルの壁を挟んだすぐ隣。

一人の男が朝ごはんを食べにこの店に一足先に来ていた。

金髪オールバックに碧眼。筋肉ムキムキの男は、眉間に皺を寄せ

ながら、食後のコーヒーを片手にパソコンでニュースを見ていた。

（うむ…やはり欧州ではまだ、経済的混乱が続いているようだ…。）

男の服装は、白いワイシャツの下に黒いズボン。首からは十字架のペンダントを下げてる。

男はふと、あることに気がついた。一緒に来ていたはずの友人二名が、席を外してからやけに時間が経っていること。

（たく…デザートを取りに戻って来るまでどれくらい時間がかかっているんだ…。）

仕方なく、男が探しに行こうと席を立つと…

「きゃー♪イタちゃん可愛い♪」

「ヴェー♪みんなの方がもっと可愛いよぉ♪」

聞き覚えのある意味不明な単語。

男は、ゆっくりと振り向くと、ちょうど声の主の背後にいた。

そしてこう良い放った。

「イタリアあああああ！！！！！！」

それから、男が声の主に五分間関節技をかけたのは…言うまでもない。

ドイツ side

「うう…ごめんなさい。ドイツう…。」

「たく…勝手に行動するないつも言ってるだろが!!」

「まあまあ、二人共落ち着きなさいよ。」

ハンガリーがイタリアの頭を撫でながら、俺をたしなめた。

俺も、少し落ち着きが戻ったところで、ふと疑問に思ったことをハンガリーに聞いた。

「ところで、どうして此処に女子が沢山いるんだ？」

今俺の目の前にいるだけで、学園の女子は8人いる。ほぼ全員だ。

「ああ^^今日は歓迎会よ♪」

「?誰の?」

「ヴェー!ドイツ知らないのぉー!?決まってるよぉー☆『桂木美優』ちゃんの歓迎会だよ^^ハンガリーさん♪」

（『桂木美優』??聞いたことないな…。）

「そっ♪さすがイタちゃん☆…まあ、別に知らなくても後で美優が戻って来たら紹介するわよ^^」

そう言うのと、ハンガリーは俺にコーヒーを渡した。

（うむ。…美味しい…。）

渡されたコーヒーを大人しく飲んだと…三人の女子と日本が戻って来た。

一人はベルギー。もう一人はリヒテンシュタイン。もう一人は…。

「お待たせ、ハンガリー☆このデザート美味しそうで、選ぶのに時間かかったよぉ」（へーへ；）」

皿の上に山盛りにデザートを運ぶ少女。

「こんなに食べると…後で悲惨な目に合うわよ!!」
「そう？だってどれも美味しそうだったし…。」

一つ違和感を感じた。

そう。イタリアだ。

いつもならここでナンパをし始めるくせに…今日に限ってかなり大人しい。

隣に座っているイタリアを見ると、顔を紅くして見とれてる。

（な…なんだ！？天変地異の前触れかっ!!）

まあ…確かになかなかかわいいらしい顔立ちをしている。

目はくつきりとし、鼻はスラッとしてる。更に、栗色のセミロングの癖っ毛が幼さを引き立てている。…気のせいかな、甘い香りも…。

「あれっ？もしかして、学園の生徒さん？はじめまして！桂木美優です。」

すると、少女もとい美優は俺に手を差しのべた。

「はじめまして。俺はドイツだ。ドイツでいい。敬語も使わなくていい。」

俺も、美優の伸ばしてきた手を握り、握手を交わした。

「…うん♪わかった！私のことも美優で良いよ^^」

はじけるような笑顔が俺の中に、強烈なインパクトを残した。

まるで…恋に落ちたかのような…。

♪イタリアside♪

ドイツに怒られた後、反省しながら俺は胸を弾ませていた。

(可愛い女の子だといいなあ♪)

そう思っていた矢先…

「お待たせ、ハンガリー☆ここのデザート美味しそうで、選ぶのに時間かかったよお♪(^^;)」

声のする方を向くと、そこには皿に沢山のデザートをのせた一人の女の子。

その可愛い容姿とは裏腹に、かなりの大食いみたいだ。

でも…そのギャップが彼女の魅力といっても、過言ではない。

自分の顔が紅くなるのを感じた。

「あれっ？もしかして、学園の生徒さん？はじめまして！桂木美優です。」

ドイツと挨拶を交わした後、彼女は、俺も手を差しのべた。
戸惑いながらも、俺は彼女の手を握った。

「はじめまして^^俺はイタリア。パスタとピッツアが大好きなお茶目さんです♪君可愛いね♪敬語は使わなくていいよ！よろしくね☆」

にっこりと俺が笑うと、彼女も笑い、鈴の鳴るような声で言った。

「…はじめまして♪美優って呼んでね^^」

ふんわりと香る甘い香り。光のような透き通る声。真っ直ぐに見つめる大きな瞳。だが…どこか悲しげな笑顔。

こうしてみんなと楽しく話してるのに…どこか遠い目をしてる。

それでも…胸の高鳴りは抑えきれず…いつも通り振る舞うのが精一杯。

こんな思いは…生まれて初めて…。

美優は俺にフォークを差し出して、「食べる？^^」と聞いてきた。

ドキッ

あどけない表情が…可愛いかった…。

「うん♪ありがと♪」

お礼にほっぺたにキスを落とした。

顔を真っ赤にする美優が、可愛いくて、面白くて、もっと遊びたかったけど…ドイツと日本の背後から、サタンと閻魔大王が見えた気がしたので、これ以上はやらなかった。

（ふうーん。日本はともかく…ドイツがなく…珍しい。）

でもそうと決まれば、話は早い。

（宣戦布告だよ。ドイツ。）

イタリア魂を見せてやる。

三日月にて（後書き）

ここでちょっとこぼれネタ。

イタちゃんがヒロインのほっぺたにキスしたとき…

日本とハンガリーはその様子を写真におさめながら…

（ハンガリーさん。）

（はい。日本さん。）

（私達のするべきことは…）

（ただひとつ。）

（（イタリア×美優の薄くて高い本を描くこと！！））

その後、写真は美優が後でドイツに手伝って全消しましたとき☆

めでたし、めでたし♪

はいっ！！

てな訳で、歓迎会の乱入者は枢軸メンバーに決定しました☆

日本さんとその他女子は今回空気！！

ううゝ（T―T）

だって…今回はイタちゃんとドイツのラブフラグがメインだもん…

（T―T）

歓迎会はまだまだ続きます♪

秘密の海

イタリアさんと日本とドイツくん達と合流後、さすがに昼前頃になると人混みがぶり返してきた。

何人かの子達も、用事があるようなので先ほどもからちらほら、学園に戻っている。結局今この場に居るのは、私とハンガリー、リヒテン、日本、ドイツくん、イタリアくんの6人だ。

そろそろ出ようかな…と思案していた時だ。

「そうだ！美優ちゃんをあの場所に連れて行こうよ！」

(?)

イタリアくんが何か思い出したかのように言った。

「あの場所って？」

私は日本に問いかけた。

日本の説明によると、遠浅の海で綺麗なエメラルドグリーンの色をしてるらしい。

「へえ、行ってみたいなあ♪」

「じゃあ、行こうよ!!」

『えっ?』

イタリアくんの突然の申し出に、全員の声が重なった。

「までイタリア。明日から授業も始まるから、美優の為にも今日はこのまま解散の形でいいじゃないか？」

「えーっ（3）」俺今日行きたいのにー…。」

「私の方は大丈夫よ。昨日最低限の必要なものは買ったし。」
「ねっ♪じゃあ…俺達だけで行こうか？」

不意に、イタリアくんの手が私の頬に伸びてきた。

ドキッ

さっきまでの『甘えん坊モード』ではなく『男前モード』に切り替わったイタリアくんは、なかなかの男前だ。

その整った目鼻立ちが、気づくと至近距離にあったので、思わず顔が紅くなると、ドイツくんが無理やり引き裂いた。

その様子を日本とハンガリーが写真で撮ったのはまた別の話…。
とにかく！！

私達6人は、イタリアくん先頭の下秘密の海に向かった。

「…まだあゝ？」

「もう少し♪」

このやりとり…もう五回目。

電車に乗らず、私達はひたすら海沿いの道を歩く。
車は全く通らず、歩いてる人も私達だけ。目に入るのは、綺麗な

海と白い砂浜、雲ひとつない空、ヤシの木の群生地だ。

私はいつの間にか、みんなとの間に結構な距離を作り、イタリアくんといっしょに後ろの方で、えっちらおっちら歩いてる。

気温30℃の真昼。日陰もなく、頼りになるのは海からの風のみ。みんな、汗だくになりながらただひたすら歩き続ける。

「あれ??? あそこに白いモコモコな物体がある…。」

歩き続けて数十分後…

前方に白い物体が目に入った。

私より若干後ろにいたイタリアくんは、急にもうダッシュでそれに近寄った。

そして、それを抱き上げると、「にゃんこカワイイにゃんこカワイイにゃんこカワイイにゃんこカワイイ…×100」と叫びながらゴロゴロ、アスファルトの上を転がった。

私も、後に続いてにゃんこにダイブした。

リヒはにゃんこの頭を撫でている。

(うわー(＜|＞) どうしてにゃんこはこんなにもカワイイの!?)
この可愛さは罪だよ!!)

なんてくだらないことを考えていると…

ピューッ

にゃんこは私の腕の中から離れ、ハイビスカスの茂みの中に逃げてしまった。

「Σあっ！！まって！！」

「ちょ！！美優！？」

にゃんこを追いかける私を先頭に全員が後を追いかけた。

ハイビスカスのトンネルを抜けると…そこに広がっていたのは…透き通るように広がる青い海。

意外にも、浜辺のエリアは狭く、ドイツくん二人分ぐらいだ。

「わぁ…もしかして…此処？？」

そうみんなに問いかけると、みんなは笑顔で頷いた。私が海に見とれていると、みんな波にダイブしていった。いつの間にか、みんな裸足になっていた。

私も裸足になって波にダイブした！！

みんなテンションが上がって、濡れてもお構い無しだ。

そんな、いかにも青春って感じの輪の中に、一人だけ浜辺に座り込む青年がいた。

日本だ。

＼日本side＼

（全く：あの方々ときたら：。）

日本の手にはいつの間にか先ほどのにゃんこがおさまっていた。
白いふわふわの毛に埋もれていたのは、青・白・赤の順のストラ
ップ柄の首輪。

日本は、もう一度首輪を見ると深くため息をつき、背後にある茂
みに向かって言った。

「いつまでそちらに隠れているんですか：フランスさんとイギリス
さん。」

「：気づいてたのか：日本。」

「アレレ（＾|＾；）見つかったちゃった？」

茂みの中から出てきたのは、眉毛が特徴的な人と髪の毛が長く無
精髭のはえた人。

「当たり前です。まあ、おそらく気づいてたのは私だけのようだし
たけど。」

「いつから気づいてたんだ？」

少しためらいながら、日本はイギリスと呼んだ人の質問に答えた。

「にゃんこですよ。どう考えても、あの場所に不自然ににゃんこが
いるのはおかしいですよ。でも、その時点で誰かはわかりませんが、
首輪の柄でフランスさんは確定しました。次に、このにゃんこを抱
き上げたとき、薔薇の香りがほのかに感じたんです。：まさかとは思
いましたか：。」

（でも、こんな近道を案内してくれたのは、感謝しますが…。）

そこまで言うと、日本は若干二人を睨み付けた。

「で？ご用はなんですか。（＾言＾）」

殺気丸出しに日本は問いかけた。

「ちょ…（＾―＾；）大丈夫だよ！！今日はお兄さん達、ストーカーとかじゃないから！！…多分。」

「Σおいっ！？多分って…。俺は違うぞ！！ただ…あの見かけない少女は誰なのかって…。」

（やはり…美優狙いですか。まあ、予想はしてましたが…。）

「すみませんが…本日はお引き取り願います。いずれにしろ、明日には生徒会に顔を出しますので。」

日本の言葉を聞くと、二人は驚いたようだ。

それもそのはず。普段から控えめで、頼まれごとには嫌と言えない性分なのだから。

「何故だ！！」

眉毛の青年は声を張り上げた。

日本は、海の方でハンガリー達とはしゃいでいる美優を、穏やかそうな目付きで見ると、はっきりとした口調で言った。

「貴殿方に美優を会わせる訳にはいかないからです。」

「…それは…国として？それとも…人として？」

無精髭の青年にそう聞かれると、さすがの日本も反応に困った。

「それは…両方…ですかね？」

毎度のことながら、曖昧な回答を受けとると、無精髭の青年は眉毛の青年の手を引いて元の道を引き返した。

「Σおっ…おi「何があったか知らないけど！！…本気なんだね。」

青年の挑発的な態度に、日本は嘲笑うかのように…

「はい。」

と答えた。

二人が去った後、美優がやって来た。

「日本は入らないの？」

「ええ。私はおじいちゃんですの…。さあ、美優も行ってるしやいハハイタリアくん達が呼んでますよ。」

「…うん♪」

美優が再び海に戻ったあと、日本は一枚の写真を取り出した。

そこに映るのは…セーラー服を着た美優の姿。

（いつまでも…足長おじさんではいけませんね…。私も…優也様も…。）

秘密の海（後書き）

※補足

日本さん達は、にゃんこが案内してくれたルートとは別の道から、海岸に行こうとしてました。眉毛達はこの道を知っていたらしいです。補足します。

m () m

さて：今回はネタ出しにかなり苦労しました（^| ^;）
とにかく、青春って感じをだしたかったです！！

青春↓青い↓空↓夏↓甲子園↓夏休み↓海

：作者の思考回路にツツコミを入れたら負けなんだぞ！！（T|T）

あと、みなさんが気になる突然出てきた人名。
その正体は！？

次回、l e t ' s 初登校！！

太陽の種

種を買った。

なんの種か解らないけど…。
買ってみた。

鉢を、日の当たる窓際に置いて、水を差す。

何が咲くのか楽しみだ。

花も…自分も…。

今日からいよいよ本格的に授業が始まるらしい。

今まで、各国の政治や経済関係で授業がストップしてたらしい。

てな訳で、私は今日が初登校だ。

授業は主に国・数・理・家・英と政治・国際・福祉・マナーの計
九教科。講師は全てその道のプロ！！

また、週一回の世界会議ってのがある。

今日はそれがあるので、私はそこで本格的に紹介される。

だが、会議は午後からなので、それまでは授業があるらしい。

クラス分けは、州ごとだそうだ。私は日本人だから『亜細亜クラス』ってクラスになった。

日本がクラス委員長らしい。

他にも湾ちゃんも同じクラスだから、安心だ。

昨夜、急に湾ちゃんが来て、私に携帯と湾ちゃんお手製の『学園要注意人物リスト』を置いていった。

携帯は、ごく一般的なモノで、学園側から支給された。

（料金とか考えたら怖いので…なるべく使うのは避けよう…。）

で、肝心の『学園要注意人物リスト』といいのが…

「この学園には、変態が沢山いるから、この紙は美優の純潔と魂を守るためのモノヨー！！私もいつも一緒にいれる訳にはいかないから…初対面の人にはまず、これを見て確認してヨー！！」

…ありがたいやら…めんどくさいのやら…。

とりあえず、リストと携帯をカバンに突っ込んで、制服に身を包み…いざ、朝ごはんへ！！

また部屋に戻ってくるのがめんどくさいので、カバンもついでに持って…私はstudent hallに向かった。

————朝食後

湾ちゃんとベルと一緒に朝ごはんを食べた後、湾ちゃんは日直らしいから、ベルに途中まで案内してもらった。

でもベルもクラスが違うから、簡単な案内を聞いて一人で教室まで向かった。

…が。

（やべ…ここドコ。D。≡。D。?）

迷子フラグが立ちました。

（落ち着け、落ち着け自分!!）

ベルと別れた後の自分の行動を思い返した。

真っ直ぐに廊下を歩いていたら気づいたら見たことないエリアに出て…道を引き返そうにも通ってきたわからず…めんどくさいので外からもう一回入り直そうとして…

（自分…何やってんの!!）

自分の駄目っぷりで若干自己嫌悪に陥りそうになったとき…

「オイ…そのお前…誰アル!! 何者か名乗れアル!!」

背後からカタコトの日本語をしゃべった人に声をかけられた。

なんか警戒されてるっぽいけど、そんなの関係ないっ!! 藁にもすが
る思いでその人に助けを求めた…。

「お願いします!! 助けてください!!」

「はっはっはー(^ ▽ ^)

日本から聞いてはいたが…おめえが『美優』アルか!!」

事情を話すと、似非中国人の彼は気さくに笑ってくれた。

「我のは『中国』アル! 『にーに』と呼ぶヨロシ☆」

(似非じゃなかったんだ…。)

心の中で謝りながら互いに自己紹介を交わした。

にーには、美食部の食材管理のため、食物室で食材の管理をした
帰りだったらしい。

「この道は近道ではあるが…朝のうちは霧がよくでるから、あまり
人は通らねえアル。」

「にーには平気なの?」

「霧なんか我の中国拳法でなんとかするアル♪」

(なんとかなるモノなのか(^ | ^ ;))

そうしていると、案の定霧が私達の周りを囲った。

にーにも、真剣な顔で「早く教室に行くアル。」と言って、私の手を引っ張った。

周囲は真っ白な霧。見えるのは目の前のにーにの背中だけ…。

にーにの手から流れる体温が温かく感じた。

（なんか成り行きで手繋いでるけど…まっいっか。）

自然と顔がほころぶような、ほわほわとした気持ちになった。

———亜細亜クラス

「美優！！遅かったから心配したヨー！！」

教室に着くと湾ちゃんが真っ先に、私に詰め寄った。

「ごめん、ごめん。ちよっとさ迷ってた（^| ^;）でもにーにが途中で助けてくれたから…。」

その瞬間、教室のガヤガヤとした空気がピタッと止んだ。

ガチャーン

教室の隅で花に水をやっていた日本が鉢を落とした。

「に…日本…大丈夫b」「い…今なんと?」「はい?」

一応笑顔ではあったが、日本から見ではいけないようなどす黒いオーラが溢れていた。

「えっ?? だから…にーにが「やはり!!!」」

そこまで聞くと、日本は私ににーにの居場所を問い詰め、灣ちゃんと共に教室の外に出てしまった…。

(何が何やら…。)

教室に一人取り残された私は、とりあえず日本が落とした鉢を片付けた。

にーには教室の近くまで私を送ると、そのまま生徒会室に行ってしまった。

(生徒会室って伝えて大丈夫だったかなあ。)

私の心配通り、このとき生徒会室ではとんでもない事件が起きていたのだ。

(あっ! この花可愛い。)

太陽の種（後書き）

久しぶりの更新☆

やったね！（b^_^。）

今回はいつもより少ないです（<|>）

すみません m（| |）m

（そして相変わらずの駄文ですみません m（| |）m）

ヒロインが若干キャラ崩壊の可能性が Σ （ $\forall$ ；ノノ

ヒロイン…警戒心無さすぎ…。

そして日本と湾ちゃんがキャラ暴走。

もう…なにが何やら…。

次回。

なんかコメディ学園になりそう…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4267v/>

甘えても…良いですか？

2011年11月14日16時09分発行